

## 図画工作教育講座 13 《 鑑賞 》

何を基準に「よい絵」と判断するのか

①落書きみたいだと思っても

ピカソのサインがあるからよい絵だ。

②画廊で見た知らない作者の絵は、

高い値札だからよい絵である。

③美術館では値札が付いてないけど、

県知事賞の札があるのできっとよい絵である。

④札が付いてないときは、豪華な額縁の絵がよい絵である。

⑤知らない作者だし、値札も賞札もないし、額縁も普通だし、そこで、ようやく「絵」を見る。



鑑賞の方法が分からないから、絵のよさを周りの付属物で判断する。

お宝鑑定では、鑑定人に。← せっかく自分で素敵な絵と満足しているのに！

鑑賞の視点は、自分の部屋に飾って毎日眺めてみたいなあと思えること。

ロックバンドの演奏が好きな人もいれば静かなムード音楽を好む人もるように、絵の好みも人様々。

自分なりに「この絵、なんだか好き」と言える絵が、その人にとっての名作である。

他人に自慢したいとか高値で転売しようという欲に目がくらんだら、絵そのものが見えなくなる。

鑑賞の能力とは、絵そのもののよさを自分なりに感じとること。  
それは他人に左右されず自分の人生を生きていく姿勢にも繋がること。

これまでの鑑賞は、作品を見せながら作者の名前や制作年などを先生が説明し、画面の情景や遠近法など構図の工夫と、作者はこんなつもりで描いたなどの解説を子どもたちが聞く知識重視・暗記型の学習形態が多かった。

これからの鑑賞は、子どもの想像力や感受性を生かした感性重視・対話型の絵そのものから直接感じとる学習形態である。

例えば どんな音や声が聞こえてきますか？

この絵のどの場所に行って何をしたいですか？など

土田麦僊・罰では、

3人の子どもたちはどんなつぶやき（思い）を？

この絵の前後のお話を創ってみよう

あるいは

雪舟の破墨山水図で、

墨絵の基本「直筆・側筆・渴筆」を描く体験をすることで、墨絵のよさが分かる授業の取り組み。

(参照・前田康裕著 前田式絵画指導2 明治図書)



ブリュッゲル・雪中の狩人



※ 墨絵を体験した児童の感想

最初はただの雑な絵だと思っていたけど、違って見えてきた。

墨のよさが分かった。

見る人によって見え方（山に見えたり滝に見えたり水にも霧にも）が違う絵になった。

アートカードの活用 教科書補助教材 40枚3セット

神経衰弱ゲームなど遊びを通して様々な文化遺産に慣れ親しむことは、鑑賞学習のはじめの1歩でもある。



小学校における鑑賞は、一つの作品を長時間扱うよりもたくさんの作品を短時間扱う。子どもの集中力は短い。

もう一つの鑑賞 表現の参考資料として作品を見ると、導入・展開・終末ではその段階のねらいに合わせて作品を選ぶ必要がある。

- \* 導入時 見通しを持たせるための参考作品
- \* 展開時 技法が分かりやすい参考作品
- \* 終末時 自分をふり返る自己作品

\* 私が最も重要だと思うのは「賞もらった作品だけがよい絵ではない」ということです。

私たちは、肩書きに囚われてしまうことがよくあり、学歴で人を判断してしまうこともよくあります。熊大にいるから頭がよいとは限りません。このような先入観やレッテルに囚われず、自分の目で見て「自分では、この絵はどうなのか」しっかり判断しなければならないことを学びました。

このような考え方は、中学校・高校・大学・社会人になるときに一番大切なことだと思うからです。新しい人と出会うとき、先入観を捨て、その人自身を見るのが大切だと思うし、障がいを持っている人を見ても、対等に付き合うことができると思います。生きていくうえで大切なことを教えることができるから、この言葉は、深く、重要だと思いました。

\* 鑑賞をするときに、どんな鑑賞を子どもにしてほしいか、が大切だと思った。自分が表現をしたいと思って、より技術を上げたかったり、自分の表現の幅を広げたいと思ったりしたときに重要なことは、やはり鑑賞だと思ったからだ。

自分の表現が評価されると自信につながる。つまり他人の鑑賞によって、より自分を表現しようと思えるようになる。鑑賞では感性や体験を重視している。ただ有名な作品を紹介するだけでなく、その作品について子どもが「どう感じるのだろう」と考えてみたり、実際に体験したりすることで、より作品の凄さや面白さが分かるだろう。鑑賞は普段の生活の中でも、空や植物をきれいだなと感じる気持ちにつながる。これから出会う作品や自然を、より楽しめるようになるためにも鑑賞はとても大切だなと思った。

\* 私がこの講座で最も重要だと思ったことは、子どもの思いを大切にすることです。

先日「子どもの美術展」を見に行きました。どの作品も題名を見る前から、この作品のタイトルはこれだ

ろうなと、予想できるほどの思いが詰まっている絵でした。絵だけでなく立体でも、自分の強いこだわりを持って、それを貫けば必ずいい作品ができると思います。自分のこだわりが、なかなか上手く表せないときこそ、教師が助言し見守っていくことが大事です。

今回この講座で、私の中でたくさんの意識が変わりました。よい作品とは何なのか、これからも研究していきたいです。

\* 最も重要なのは、これまでと・これからの鑑賞教育についてです。

なぜなら、学校という場所で「教育」を行う以上、学校以外で学べることを教えても無駄だからです。これはどの教科にも当てはまることですが、知識や用語は学校以外でも十分に得ることができます。

私は、学校という場は、もっとその教科の楽しさ、深く言うならば概念を理解させる場だと思っています。よって、今までの暗記と知識型の鑑賞教育は改められ、体験・感性型へ移行すべきだと強く感じたからです。

\* 「何がよい絵なのか？」という内容が、私にとって最も重要であると思った。コンクールで賞を獲った絵や本物そっくりな絵（写実的な絵）が良しとされているところがあり、児童生徒にも「上手に描きたい」という憧れがあり、小・中・高と成長する中で「上手く描けないから図工美術は苦手・嫌いだ」という人も多いただろう。小学生のときに、先生に1回絵を褒められただけで、絵画の道に進もうと考えた人もいるかもしれない。

上手下手や好き嫌いも、もちろん感じ方や受けとり方にもよるが、それだけで絵を評価することはできないと思う。優しい雰囲気や淡い絵も、力強く荒々しい線や色づかいかも、それぞれによいところがあって、その絵そのもののよさを感じとれるような人を育てることが、図画工作科教育における目標ではないかと考えさせられた。

小さいときから絵を描いてきて、今も美術に携わっている人間として、忘れてはならない心を、もう一度確認させていただいた講義だった。

\* 私が講座の中で重要だと感じたことは、必ずしも鑑賞よりも表現を重視する必要はないということである。これまで私は、表現の方が子どもの発想力が十分に生かせるため、表現を重視すべきだと考えていたが、講座が進むにつれて鑑賞の大切さを実感したからである。

鑑賞においても、子どもの感性を働かせるように留意すれば様々な感じ方をそれぞれができるし、表現活動の導入として鑑賞活動を用いれば、子どもが感じたことをそのまま表現につなぐことができるのである。したがって、私は、図工指導をしていくときは、鑑賞活動の魅力を授業に生かせるようにしたいと思った。

\* 表現と鑑賞は、上手くバランスを取りながら、どちらも行う必要があると感じました。表現では、製作活動を増やすほど多くの体験ができ、また、自分を表現する機会が増えるというよさがあり、鑑賞では、作品のよさだけでなく、自分に無いものを学び取ることができるから。

子どもは、どうして表現活動の方を好むと思うが、鑑賞活動のよさを伝えていけたらなと思いました。

\* 私はこの授業を通して、多くの具体的な指導法を学びました。今まで、図工の指導法を学ぶことはあったものの、それをどのように子どもたちに伝えていくかは学んでこなかったため、この授業はとても有意義なものになりました。特に重要と思ったのは、鑑賞に関する講義です。子どもの素直な気持ちを大切にす鑑

賞、子どもの感情を大切にすることを鑑賞が大切だと思いました。

\* 私がこの講座で重要だと思うのは、鑑賞するときに何を大切にするかということだ。

私は今までゴッホが描いた絵だから上手だとか価値があるとか思っていた。だから子どもたちに鑑賞について学んでもらうときに、どうしたらよいかずっと悩んでいた。(中略)何を素晴らしいと思うのか、面白いと思うのかというのは、この授業で「不思議な魚」や「表情」の作品をスライドで見せて評価したときにも分かるように、人それぞれである。その自分自身の感性を大切にすることが鑑賞するときに大切なことであると思う。自分で良さを感じることによって、自分が良いと思っていなかった作品でも良さを見つけられるようになっていくと思う。沢山の作品を鑑賞し感じることで、子どもたちのデータベースが増え、表現につながっていくだろう。したがって、鑑賞の際大切にすることが最も重要なことだと思う。

\* 私が一番なるほどと思ったのは「本物そっくりに上手に描いたものがよいものであるという呪縛を解く」という言葉です。どうしても、そっくりな絵、技法を上手く使ってある絵がよい絵だとされることが多く、確かにそれらも素晴らしいとは思いますが、絵を苦手とする子は「自分はよい作品が描けない」と楽しさや面白さどころか苦痛になってしまいます。だから、最初に述べた言葉が大事だと思います。

それから「授業で教える技法や表現方法は、表現するための方法であり、目的ではない」という言葉にハッとしました。自分は技法を上手に使った絵がよい作品だと思い込んでいたのだと気付いたからです。

教師になる前に、このことに気付くことができ良かったと思います。有り難うございました。

\* この講座で授業づくりについて学んだときが、自分にとって最も重要だったなと思う。

図工の授業では、技法を教え感性を育てていくことが重視されているが、これは他の教科にも関係あるのではないかと感じられた。私は、専攻が音楽であり、似ている部分があるなと思った。音楽を鑑賞する際にも、音楽を表現するときにも、子どもたちの演奏力などではなく、表現力や感性を育てていけるような授業をつくっていくことが、図工と同じく重要だなと感じられた。

\* お手本のような存在として、単元の初めに鑑賞させる作品選びは、とても重要だと思いました。

プロの凄い作品よりも身近な先輩や同学年の作品を鑑賞させた方が、参考になるうえにやる気も起きるのだという内容は、とても重要だと思いました。

子どもたちの側から「私の思いを、この作品で伝えたい」といったような気持ちが湧いてくるような授業を、教師は様々な工夫をしてやっていくべきだと思うので、私は、この「やる気」に関わる内容が最も重要だと思いました。

## よい絵とはなににか

### コンクールに入選する絵がよい絵なのか？

特選や入選の絵は、よい絵であるということは否定できない。

しかし、入選する絵がよい絵であるなら、落選する絵は悪い絵であることになる。入選する絵の数は決



まっているので、よい絵であっても落選する。

## 本物そっくりに描く絵がよい絵なのか？

子どもの中には、そっくりに描くことへのあこがれは強い。絵画表現の中にも、ガラスの透明感やブルドーザーの重量感など「質感」を追求する一面がある。

描写力のある絵がよい絵なら、本物そっくりに描く描写力を付けることが図工教育の目的になってくる。しかし、技術の習得には繰り返しのトレーニングと専門的な知識を基にした指導が必要であり、教師にも子どもにも大きな負担となる。

熊本城は、どっしりと大きかったよ

ヒマワリが、ぐんぐん伸びて育ったよ

100年後の私たちの町は、こんなになってるよ

子どもたちの思いが生き生きと伝わってくる絵がよい絵である

子どもの思いを表すために、太くて濃い線を使えば石垣の力強い感じが出るとか筆の穂先を使って濃淡を付けるとヒマワリの花びらの感じが出せるとかの知識や技術は、「思い」を表現するための手段であって目的ではない。

よい絵とは、上手に描いた絵ではない。自分の思いを自分なりに表現しようとしている絵がよい絵である。自分なりの表現とは、写実的であったり主観的であったりする。本物そっくりに描いた絵をよい絵だと思う人もあれば、素朴な線で豪快に表した絵をよい絵だと感じる人もいる。見る人の好みによって、よい絵の判断は変わってくる。

1枚の絵に、好き・嫌いと言えるが、それがそのままよい絵・悪い絵を意味するものではない。

教師がまず為すべきことは、絵を描くことが楽しい・工作をすることが面白いという子どもの心を育てること。描写技術の上手さではなく、その子どもなりの表現をお互いに認め合う雰囲気や学級の中に醸成すること。

その基盤のうえに、子どもの思いを実現させるための様々な技法を紹介し、その複数の技法の中から子ども自身が選択し実行することで、子どもは自らの表現力を身に付けていくことになる。